

## 広瀬絣センター

絣（かすり）は、織物になったときに幾何学的または絵画的な模様を描き出すように糸を染める、日本の伝統的な織物の技法です。模様の端がぼやけるのが特徴で、これが名前の由来となっています。安来の広瀬町は、1825年から20世紀初頭まで、絣産業の中心地として栄えました。その中では、時間をかけて独特の特徴を持つデザインが多く考案されました。この貴重な伝統工芸品の振興を目的に、1985年に「広瀬絣センター」が設立されました。（「かすり」は複合語の場合は「がすり」と発音します。

### アジア全域で用いられている技法

絣は、アジアで長い歴史を持つイカット技法の1種です。「イカット」という言葉はマレー語/インドネシア語ですが、この技法はインドで始まったと考えられています。この技法で作られた美しい絹織物が、8世紀に中国から日本に持ち込まれ、奈良の正倉院で保存されています。この技法は琉球王国（現在の沖縄）で、12世紀から高度に発展しました。そして九州の薩摩藩が1609年に琉球に侵攻した際に、南日本に持ち込まれました。18世紀中頃までには、日本の中央に位置する奈良まで広がりました。安価で強度のある木綿織物に応用されたため、多くの家庭の手の届く価格になりました。広瀬は、19世紀初頭から日本の絣の有名な産地となった産地の1つで、人気の高い製品は全国に出荷されました。

### 細かく手間のかかる作業

高品質の絣を手織りするのには非常に手間のかかる作業で、30以上もの工程が必要となります。着物一着に必要な一反（長さ約13メートル、幅約38センチ）を織るのに一般的に2〜3ヶ月かかります。

広瀬絣によく使われる綿糸は、長い木枠の上に配置され、染める前に模様の印をつけます。広瀬絣では、これに再利用可能な型紙を使います。型紙は数世代にわたって使われたものもあります。絣のポイントは、糸の特定の部分に染料（通常は天然藍）が染みないようにすることで、それによって白い部分が残る、織り模様ができます。広瀬絣はこれに関して最も伝統的な方法を用います。染料が浸透しないように必要な部分を粗い麻繊維でしっかりとしばるのです。藍の大桶で染色した後、しばっていた糸を解き、水洗いして乾燥させ、糸を織り上げます。デザインや染色の工程は綿密な計算の上に成り立っており、織り手は一本一本の糸を正確に配置し、各糸をずれなく配置しなければなりません。束ねたり、生地を織ったりする作業は、伝統的には各家庭で行われており、子供たちが手伝うこともありました。

## モチーフと模様

広瀬絣センターには、地元の高度な絣織物の例が多く展示されており、昔ながらの模様のサンプルのコレクションもあります。絣の模様は、元々は小さく幾何学的なものである傾向がありましたが、その後より精巧で絵画的な模様が19世紀に発達しました。広瀬の絣職人は、大きくて大胆な絵画的なモチーフの使い方をマスターし、鶴や亀などの長寿の象徴である縁起の良いモチーフや、その他鯉や幸運の神々などの縁起の良い象徴を用いるようになりました。これらのモチーフは、その後、大きな幾何学模様と巧みに組み合わせられ、しばしば互いにダイナミックに相対して重なり合うような構図が用いられるようになりました。簡素な幾何学模様は作業着や着物に、大胆な絵柄は着物や座布団、暖簾、布団カバーなど、モチーフを効果的に表現できる面積の広いものに好まれました。

広瀬絣センターでは教育に力を入れています。センターには30台以上の伝統的な織機が設置されています。藍染めのワークショップや、展示されている広瀬絣の製品を購入したり、センターにあるそば屋で地元のそばを食べたりすることができます。